

がいて困ったり、コミュニケーションの不足で混乱が起こったり、意見が合わなくて争いになったりすることもあります。定められたスケジュールに従って旅行はどんどん進んで行くので、限られた時間でなんらかの解決をすることを迫られます。それだけに、子どもたちは真剣に考えます。苦勞をすることもあります。何とか問題を解決することができれば、お互いの信頼も深まり、旅行の後の学校生活もより充実させることができます。寝食をともにすることは、やはり、子どもたち同士や先生と子どもとの絆を強くするのです。卒業してからも修学旅行の思い出が強く印象に残っているのは、みんなで一緒に日常とは違う特別な時間を過ごすからでしょう。

◆ 日本の生活文化を学ぶ

最近では、修学旅行の新たな必要性を感じるようになりました。それは、一昔前まではだれもが普通に持っていた日本の生活技術やマナーを子どもたちに伝える数少ないチャンスだということです。

修学旅行では、今でも畳の部屋のホテルや旅館に泊ることがほとんどです。ところが、多くの子どもたちは、畳の部屋で生活することに慣れていません。布団を敷いたり、たたんだりすることも、経験がほとんどない子が珍しくありません。(かといって、ベッドの作り方をしっかり身に付けているかというところでもないようですが) 人数分の布団をどのように並べれば良いか、シーツや枕カバーをどのように使うのか、朝はどのように片付ければよいか、などは、普段は教えられる機会はありません。

「毎日畳の上に座って食事している人」ときいてみたら、六十数名のうち、ほんの数名しかいませんでした。夕食の時、大きな部屋の畳の上に並んで座ってみると、どうもぎこちない子が多いのは当然でしょう。長い時間正座をするのはもちろん大変ですが、見苦しくないように上手に足をくずすことも、慣れないと簡単ではありません。黙っていると、ご飯のお代わりをもらいに来て、立ったまま茶碗をぬっと差し出すというようなことになってしまいます。子どものころから畳の部屋で過ごして来た世代の人たちにとってはあまりに当たり前で、無意識に行動しているようなことでも、教えられていない子どもたちにはできません。

大きなお風呂に友だちと入るのは楽しいのですが、いざ裸になって風呂場に入ると、いきなり浴槽に飛び込もうとする子もい



ば、どうしていいかわからなくて戸惑う子もいます。子どもたちが使い方を知らないのでお風呂の腰掛けや湯桶がいつまでも積み重なったままになっていることもあり、その日の夜は、急速「お風呂の入り方講座」ということになりました。大きなバスタオルを使わないで体の水気を取る高等技術などは、風前の灯かもしれません。ごく少数ですが、抵抗があって、みんなと一緒にお風呂に入れない子もいます。

幸か不幸か、私たちの学校のトイレは全部洋式なので、1年生のときに和式トイレの使い方を教える必要がありません。6年生をみんなトイレに連れて行って「ここにこう足をおいて」などとレッスンをするのもどうかと思うので特に何もしていませんが、駅などでトイレに行った時にみんながどんな使い方をしているのか一抹の不安があります。新幹線などで和式と洋式が並んでいる時は、和式が空いていても、洋式の方に列ができます。以前、アメリカの子どもたちを引率した時に和式トイレの使い方を絵で説明する教材を用意したことがありましたが、日本の子どもたちにもそれが必要になって来たかもしれないと思います。

教育関係者の間でもいろいろな意見のある修学旅行ですが、私たちの学校では、当分続くことになりそうです。



小学校6年生の修学旅行に同行された佐々先生の報告です。修学旅行を様々な角度から、学習の機会と捉えて実行されているのが良く分かります。

一人っ子が大半の子も達ですから、昔に比べて「団体行動」から学ぶものが多いのは容易に想像できます。しかし、家庭での生活が洋式化しているので外国人に対するのと同じような日本文化の特訓が必要では、との佐々先生の示唆は、私にはいささかショックです。

海外の日本人の子どもたちに、どのようにして日本文化を身につけさせるかは、私自身の大きなテーマです。子どもたちに何を教えるべきかを、保護者と一緒に一度検討してみる必要があるようです。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
Eメール：kokusai_info@keimei.ac.jp